

公表 事業所における自己評価総括表

| | | | | |
|---------------|---------------------------|----|--------|------------|
| 事業所名 | 児童デイサービス さんこま(放課後等デイサービス) | | | |
| 保護者評価実施期間 | 2026年2月3日 | | ～ | 2026年3月26日 |
| 保護者評価有効回答数 | (対象者数) | 35 | (回答者数) | 23 |
| 従業者評価実施期間 | 2026年2月19日 | | ～ | 2026/02/26 |
| 従業者評価有効回答数 | (対象者数) | 5 | (回答者数) | 5 |
| 事業者向け自己評価表作成日 | 2026年3月26日 | | | |

分析結果

| | 事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること | 工夫していることや 意識的に行っている取組等 | さらに充実を図るための取組等 |
|---|--|---|---|
| 1 | 多様な自然環境と「馬を介した役割意識」の育成 山、川、牧場、そして野生動物が共生する多様な自然環境を活かし、子どもが「伸び伸びと」過ごせる環境を確保。馬事活動(給餌、水汲み、ポロ拾い等)を通じ、実生活に即した自己有用感を育んでいる。 | 広い敷地を活かし、子どもが「伸び伸びと」過ごせる空間を確保。馬への給餌、水汲み、ポロ拾いといった日常の「役割」を通じ、自己有用感を育んでいる。 | 自然環境特有のリスク(虫刺され等)への対策を強化するとともに、季節ごとの豊かな変化をより専門的な視点でアセスメント(感覚統合等)に繋げる。 |
| 2 | 「聴く連絡帳」等による活動の可視化と共有 音声や動画、写真を用いた「躍動感のある記録」により、保護者が現場の様子を具体的に把握できており、高い信頼を得ている。 | 現場でのリアルタイムな気づきを記録化し、送迎時の限られた時間でも「今日何があったか」が伝わるよう、ICTや視覚情報を活用している。 | 記録の質を全スタッフで平準化し、どの職員も子どもの微細な変化を専門的かつ具体的にフィードバックできる体制を継続・強化する。 |
| 3 | 家族全体を包含する支援体制ときょうだい児支援 利用児童本人だけでなく、きょうだい児も参加可能なイベントや、家族で馬と触れ合う機会を設けることで、家族全体のウェルビーイングに寄与している。 | プログラムを固定せず、その日の子どもの状態や希望を確認しながら、活動内容を一緒に決めるようにしている。 | 保護者から評価されている「相談のしやすさ」を維持しつつ、さらに一歩進んだ「保護者同士の交流」や「レスパイト機能」の拡充を検討する。 |

| | 事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること | 事業所として考えている 課題の要因等 | 改善に向けて必要な取組や 工夫が必要な点等 |
|---|---|--|---|
| 1 | 送迎時間の長期化に伴う、保護者との直接対話時間の制約 街から遠いという地理的条件により送迎時間が長くなり、事業所での保護者との対面コミュニケーションが限定的になっている。 | 街からの物理的距離に伴う送迎距離の増大、および送迎業務による職員の拘束時間の長時間化。 | 物理的な「遠さ」を、多様な野生動物や豊かな自然があるという「強み」の裏返しとして再定義する。対面時間の不足を「聴く連絡帳(音声・動画・写真)」の圧倒的な質と量で凌駕し、距離を感じさせない信頼関係を構築する。 |
| 2 | 安全管理体制(避難訓練等)の可視化不足 避難訓練等の安全対策は実施されているものの、保護者から「実施状況が見えにくい」という指摘がある。 | 訓練や点検が現場で完結しており、保護者の目に触れる形での定期的な報告プロセスが未確立であること。 | 「自然の中での伸び伸びとした活動」と「厳格な安全管理」をセットで提示する。虫刺され対策等の日常的な安全措置についても、実施内容を言語化・数値化(例:除草頻度や防虫剤の選定基準等)して提示し、安心の根拠を可視化する。 |
| 3 | 年度更新時期における体制安定への不安払拭 春先の職員配置や担当者の変更に対し、保護者が不安を抱きやすい傾向がある。 | 馬事活動と障害児支援の両立という高い専門性が求められるため、スタッフ個人の資質に依存する部分が大いこと。 | スタッフが代わっても「三陸駒舎としての支援の軸(待つ支援・役割のある暮らし)」が変わらないことを、個別支援計画の丁寧な更新説明を通じて証明する。新旧スタッフが揃って保護者と対話する場を設け、心理的な「橋渡し」を丁寧に行う。 |